OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

Mar.2015 No.49

10年後の関東学院大学のあるべき姿を示す「未来ビジョン（仮）」。

2014年10月に基本方針を公表した「未来ビジョン（仮）」は、関東学院にとって、新たな一歩を踏み出すための指針です。「これから10年後の2025年、関東学院大学の〝あるべき姿〟を指し示すのが『未来ビジョン（仮）』です」と規矩大義学長は言います。12月には、第一次案が策定。この「関東学院大学『未来ビジョン（仮）』第一次案」について規矩学長に語っていただきました。

関東学院には、学院の大きな基本理念、理想の教育を示す「グランドデザイン」があります。関東学院大学もまた、この普遍的な目標に向かって常に努力を続けています。しかし、若年人口の減少、社会のグローバル化、高度情報化社会の進展、高等教育に対する社会や産業界からの要求・期待の高まり、教育の自由化など、大学を取り巻く社会環境は大きく、激しく変化しており、そうした競争的環境のなかで、これまで以上に関東学院各校が輝きを増し、社会や受験生、企業から信頼され、選ばれ続けるために、近未来の学院、大学の「あるべき姿」を示すことにしました。

「10年後、関東学院大学がどういう大学になり、どういう学生を育てていくのか、未来の学院・大学の「ありたい姿」を主体的に選択し、そこに到達するためのロードマップを描く。それが「未来ビジョン」です。教職員全員が一丸となり、納得できる未来を描きたい。ワーキンググループをつくり、議論を重ねてきました。10年先、2025年といえば、まだまだ先と思いがちですが、すぐに取り組みを始めても、成果が出始めるのは2018年の入学試験に間に合うかどうかというタイミングです。その年に大学に入った学生が卒業するのは2022年。10年後は決して遠い未来ではなく、既に始まっています。」

教職員全員参加による「未来ビジョン（仮）」作り

関東学院「未来ビジョン（仮）」とは、厳しい競争的環境の中、関東学院各校が輝きを増し、社会、受験生や企業から信頼され、選ばれ続けるための10年後の「あるべき姿」と、そのロードマップを描くもので、学院を構成する教職員一人ひとりが、関東学院「未来ビジョン（仮）」の意義を理解し、具体的な目標を含む「あるべき姿」を理解、共有し、その実現に向けて力を合わせて努力し、実現していくものです。
関東学院大学「未来ビジョン（仮）」第一次案は、総合調整会議のもと、ワーキンググループを中心に策定されました。これから全職員をはじめ、さまざまなステークホルダーの意見や提案を幅広く聞き、それらを踏まえて、最終案を機関決定する予定です。

「未来ビジョン」を支える4つのビジョン

「未来ビジョン」を策定するにあたって、常に意識したのは校訓である「人になれ 奉仕せよ」の具現化でした。私立大学の将来像には、その建学の精神が常に見えることが重要です。それを踏まえたうえで、大学に課せられた教育、研究・産官学連携、学生支援、学校運営など、それぞれの視点から「未来ビジョン」に盛り込みたいことを積極的に議論してきました。そこから生まれた第一次案の軸となるのが4つのビジョンです。

ビジョンⅠは、教育について。「国際化する共生社会の持続的発展に貢献する人材の育成」を謳い、関東学院大学ならではの教育＝建学の精神に基づく全学的リベラルアーツ教育、横浜から世界に発信する国際化教育、高校から大学、そして社会への連携、学生への積極的な支援などが基本戦略として示されています。

ビジョンⅡは、教育と並ぶ大学のもう一つの役割、研究に関してです。「地域を拠点に、社会と連携した独創的な研究の推進」を掲げ、関東学院大学ならではの独創的な研究拠点の形成、研究力向上と研究成果の発信力強化、そして教員と大学院生とが「研究パートナー」としての関係を確立することを目指します。

社会との連携に関するのは、ビジョンⅢ。「『人と社会に貢献する大学』としてのアイデンティティーの確立」のために、地域との連携を深め、地域から期待される大学づくりをすることが挙げられています。

最後のビジョンⅣは、関東学院大学の運営ビジョンです。「未来の教育・研究活動を支える環境の整備」をするために、多様な人々が集い、交わるキャンパスの創出、大学の進化を支える経営体制の構築、キリスト教の精神に基づく大学としての特性を守り、発展させていくこと、などが目標となります。

そして、これら4つのビジョンを実現するための、より具体的な約60の施策が定められました。

関東学院大学「未来ビジョン（仮）」第一次案

校訓「人になれ 奉仕せよ」

関東学院「グランドデザイン」

関東学院大学の目指す10年後の大学像：「建学の精神に基づき、これからの共生社会の創造と持続的発展に貢献する大学」

ビジョンⅠ〈教育〉	ビジョンⅡ〈研究〉	ビジョンⅢ〈社会連携〉	ビジョンⅣ〈かたち〉
国際化する共生社会の持続的発展に貢献する人材の育成	地域を拠点に、社会と連携した独創的な研究の推進	「人と社会に貢献する大学」としてのアイデンティティの確立	未来の教育・研究活動を支える環境の整備
基本戦略	**基本戦略**	**基本戦略**	**基本戦略**
1. 次代に向けた関東学院大学ならではの教育を実現する教育体制の構築	1. 関東学院大学ならではの独創的研究拠点の形成	1. 地域のニーズに応える大学の「知」の還元	1. 多様な人々が集い、交わる多文化共生・滞在型キャンパスの創出
2. 建学の精神に基づく全学的リベラルアーツ教育「横浜スタンダード」の確立	2. 研究力向上と研究成果の発進力強化	2. 地域に溶け込み、地域とともに成長し、地域から期待される大学づくり	2. 学院・大学の進化を支える経営体制の構築
3. 横浜から世界へ発信し、世界から横浜へ受け入れる国際化教育の展開	3. 教員と大学院生との「研究パートナー」としての関係確立	3. 卒業生と在学生、大学の相互扶助、互恵関係の強化	3. 財務基盤の強化
4. 高校から大学へ、そして社会への連携と接続を重視した教育の推進			4. キリスト教の精神に基づく大学としての特性の堅持・発展・進化
5. 学生の大学の活動への積極的参画の促進			
6. 課外活動促進による学生の成長支援			

環境や社会の変化に柔軟に対応していく

「第一次案に対してパブリックコメントを通して広く意見を募っていますが、それをもって『未来ビジョン』が確定されるとは思っていません。また、一度策定すれば揺るがないもの、でもないと思っています。変化が大きい今の時代、数年前に決めたことが、少しずつ社会とずれてくることもあるでしょう。その時、その時の大学や学生、社会にあわせて、柔軟に目標を修正する必要も出てくるでしょう」と規矩学長。

「未来ビジョンで重要なことは、何を大切にすべきか、変えてはいけないものを見つけることでもあります。あるべき姿とは、失ってはいけないものを定めることでもあるのです。約60の施策についても、全部同時に取り組むのではなく、この施策は最優先で、こちらは環境を整えてから、と優先順位や効果的な実施時期を考えながら、また、今本当に必要なのかをその時々で精査しながら、進めていくことが必要だと思っています」。

そのため、あえて具体的な数値目標は掲げていない施策もあります。

「数字を挙げてしまうと、時として薄っぺらな目標になってしまいがちです。たとえば、何パーセントの就職率を達成します、と掲げても、一人ひとりの満足度や達成感などは、その数値には反映されません。学生それぞれが満足感をもって大学で学び、それを就職や社会に出てからの活躍に繋げてもらうことのほうが大切です。そのためにも、目標に踊らされるのではなく、そこに流れる文脈を読み取ってほしいのです」。

教育の方向性を社会に示す「未来ビジョン」

関東学院大学の主役は、どこまでも学生です。

「だからこそ、教員や大学は、真剣に将来を考える彼らに寄り添い、決してお仕着せではない道筋を示すこと。それが本来の教育のあり方なのです。そこに必要なのは数値目標ではなく、手をかけ、教育の方向性を間違えないことではないでしょうか。「未来ビジョン」は、その方向性を学生や教員、その家族や地域の方々、そして広く社会に示すためのものなのです」。

教職員が一丸となって策定する「未来ビジョン」。2015年は、こども園から高等学校までを含む関東学院全体での策定がスタートします。

関東学院大学 学長
規矩 大義
九州工業大学大学院修了。
2002年、関東学院大学工学部に着任。
2013年12月、学長就任。

関東学院に来たるべき改革を導く

それぞれの展望

昨年10月に、企画担当常務理事、総務担当常務理事、12月に、学院長が新しく就任されました。2016年4月、人間環境学部が人間共生学部へと生まれ変わります。ここでは、4人のキーマンに現在の心境と将来への期待をうかがいます。

関東学院全体の連帯をより強いものとし、育みたい人間像をわかちあう

2014年12月21日、学院長に就任した小河陽学院長。創立から130年あまり、こども園から大学院までを擁する関東学院の未来をどう描いているのでしょうか。

「2つのこども園、2つの小学校、2つの中学校・高等学校、そして大学、大学院。各校こと、真摯に教育に取り組んでいますが、関東学院全体としての連帯をより強くしていきたいと考えています」。

そのとき軸となるのは、初代院長である坂田祐、自らが制定した「人になれ 奉仕せよ」という校訓です、と小河学院長は話します。

「その理念に照らし、関東学院全体でどういう教育をしていくのかを明確にしていくべきではないでしょうか。そのときに、私がその象徴的な立場として、全体の中心になっていくことができればと思います」。

関東学院全体で取り組むこと、その一つは、一貫してどういう学生を育てていきたいのかを表明し、みんなでその姿を共有していくことが必要なのではないか、と小河学院長は感じています。これまでは、どちらかといえば、個々の学校で描いていた学生像を関東学院として共有してきたそうです。

「キャンパスが分かれていることもあり、関東学院全体での共通体験が少ないのではないかと感じています。その体験が、行事なのか、校歌なのか、それはまだわかりませんが、どこかで〝関東学院〟としてのアイデンティティーを育み、学校への帰属意識が高まる機会をつくっていきたいですね」。

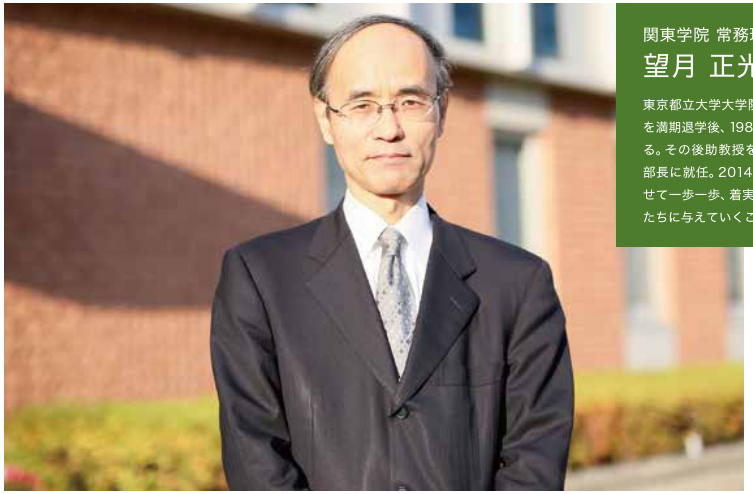
関東学院としてのアイデンティティー、その根幹には当然、キリスト教を中心とした教育が置かれます。こども園から高等学校までは、日々の礼拝などがありますが、大学になるとどうしても希薄になってしまっています。これまでの関東学院の歴史をふまえて、その点は大切にしていきたい、と小河学院長。しかし、学生や教員にはクリスチャンではない人も大勢います。そのような中で、キリスト教の精神に基づいた教育とはどういうものなのか、それはみんなで考えるべきテーマなのです、と小河学院長は強調します。

「当然ですが、宗教は強制するものではありません。しかし、世界宗教になったキリスト教には、民族の枠を超えて訴えかけ、人々の多様性を包み込む精神があります。多様性に対して寛容なのです。それは、学校も同じではないでしょうか。多様な知識や価値観の中で、多様な経験をし、自分で決断し選ぶ力を養っていく場であってほしい、と思っています」。

〝関東学院〟として、みんなが一致団結して取り組めば、よりよい学校になる、それだけのポテンシャルがある、と小河学院長は確信しています。

関東学院 学院長
小河 陽（あきら）

宗教学博士（ストラスブール第二大学）。東京大学教養学部助手、弘前学院大学文学部教授、立教大学文学部教授などを経て2010年より関東学院大学経済学部教授に就任。2014年12月21日、関東学院学院長就任。所属学会は、国際新約聖書学会、日本基督教学会など。



関東学院 常務理事（企画担当）
望月 正光

東京都立大学大学院社会科学研究科経済政策専攻博士課程を満期退学後、1986年関東学院大学経済学部専任講師となる。その後助教授を経て、1997年教授。2008年に経済学部長に就任。2014年10月から現職。「社会のニーズに合わせて一歩一歩、着実に改革を進めていく。その成果を子どもたちに与えていくことが、私の務めです」。

改革とは、言わばエンドレスなバトンリレーなのです

学校法人関東学院創立150周年に向けたグランドデザイン、中期事業計画『Olive7』に加え、望月正光常務理事はこれらを着実に遂行していくための、10年後を見据えた将来構想策定に当っています。

「『未来ビジョン（仮）』と名づけられたこの構想には、重要な点が二つあります。一つには、計画実現に向けての詳細なロードマップをつくり、経営面と財務面からシミュレーションをすることです」。

望月理事は「強い決意を持ち、確実に実現していくことが私の最大の任務」として、このように心境を語ります。

「私はエンドレスのバトンリレーなのだと思っています。与えられた任期の間を、1分でも1秒でも早く私が走ることができれば、次の方は、より有利に走れるはずです。関東学院の方々は、そうやって130年間バトンを受け継いできました。私も全力で任務を全うし、このバトンを次の方に渡したいと考えています」。

次に、大学組織へと話の焦点が移ります。かつての大学教育は文部科学省のもとで規制され、組織運営されてきました。それゆえ、どの大学も独自性を発揮することが容易ではありませんでした。

しかしながら、現在ではそれぞれの大学が自由に競うことができます。望月理事は「社会に支持されるよう大学組織が努力していかないと、必然的に他大学との競争に敗れてしまう。社会からの信頼を決して失うことがないように、努力を続けなければならない」と話します。

一方で、関東学院には「人になれ 奉仕せよ」という校訓があります。それは我が学院の柱となるキリスト教の精神に基づく教育であり、知識詰め込み型の教育とは異なり、広く人間形成にまで及ぶものとして認識されています。

「子どもたちが全人格的に優れた人間として社会へと旅立つ。そのための教育を行うというのが関東学院の理念です。知識を増やすことは重要です。ただそれだけが教育かというとそうではない。人間として豊かな人生を歩めるような、幅広い教養を身につけることも大切です」。

さて、望月理事に今一度、改革は必要ですか？と問うと「現状に留まることは、マイナスの選択と同義」と即答されます。

「社会は日々、進化し続けています。したがって、社会からより高い評価を得ようとするならば、その社会の変化に柔軟に対応しなければなりません。それは教育組織にとっても同じことなのです。改革の連続によって、自らの姿を変え続ける。そして関東学院が横浜という社会の一翼を担う存在として、コミュニティシンボルに輝き続けることが究極の目標です」。

地道な話し合いを重ね、合意を得ながら改革を進めていきます

これからの教育機関はソフト面でも変わっていく、と山下幸司常務理事はこう切り出します。

「子どもたちが学業成績を伸ばしていくのはもちろん、これからの社会の動きを踏まえて、人間的にも成長していってほしい。それには教室の中だけでは不十分です。授業を担当する教員だけではなく、学校を運営する職員についても、最大限に力を発揮してもらいたいと思っています」。

多くの女性職員が就労している関東学院ですが、その数は、日本全体平均と比較して6%も高い、女性比率48%にまで達しています。山下理事は「それゆえワークライフバランスについても配慮していかなければならない」と話を続けます。

「教育機関はこれからの厳しい時代を迎えるに当たり、総務業務も難しい局面に差しかかっていることは事実です。それを、どのように乗り越えていくのかが、私にとっての第一の課題になるだろうと感じています。しかしながら、いかなる局面であれ、お互いがよく話し合い、意識を高めながら進めていく以外に道はありません。ドラスティックな奇策などなく、一人ひとりが実力を発揮するなかで、学院全体の意識を持ちながら、全員で取り組んでいかなければならないのです」。

私は派手な旗を振るようなリーダータイプではない、と話す山下理事ですが、その言葉には力強さがみなぎります。法学部で教鞭を執る山下理事の専門領域は、労働法。だからこそ話し合いでの合意を大切に、着実な改革を進めていくという明解なビジョンへとつながるのでしょう。

さて、関東学院の各校ではボランティア活動を盛んに取り入れていますが、その活動を各校同士の連携へと展開させていきたい、と山下理事は語ります。

「いま、関東学院大学人間環境学部の学生たちが、こども園へのボランティア活動に取り組んでいます。私がイメージするのは、そうした取り組みです。たとえば、理工学部の学生たちが、中学生や高校生たちに科学の面白さ、モノづくりの面白さを教えるといったことです。少子化社会の中で、兄弟がいない子どもたちが増えていますが、その役割をこども園から大学院までの、一貫校である我が校が担っていく。そのことは人間力を身につける大切な機会となると考えています」と山下理事は続けます。

「関東学院ではキリスト教に則り、他者への思いやりを核とする温かい心の有り様を教えています。〝人になれ 奉仕せよ〟という我が校の校訓を通じて、厳しい時代を生き抜く豊かな人格を育んでいってもらえることを私は切に願っています」。

関東学院 常務理事（総務担当）

山下 幸司

青山学院大学大学院法学研究科博士課程を単位取得退学、関東学院大学法学部法学科にて労働法を専門領域として教え、2000年に法学部長に初就任。通算5期に渡り法学部長を務め、2014年10月から現職。「教育機関にとって、いまから5年間が特に辛い時期。この難局を、全員で力を合わせ、乗り切りたいと思います」。

関東学院大学 人間共生学部 設置準備室長

新井 信一

筑波大学大学院経営・政策科学研究科を修了後、関東学院女子短期大学に着任。2006年に関東学院大学人間環境学部教授になり、現在は人間環境学部現代コミュニケーション学科長であると同時に、人間共生学部設置準備室長を務める。「校訓に基づき、他者に共感し協働できる人材を育てるのが狙いです」。関東学院高等学校29回卒。

課題解決型の授業を通じて、実践力を身につけさせます

「人間環境学部は、2016年4月から人間共生学部へと生まれ変わり、「コミュニケーション学科」と「共生デザイン学科」の2学科体制に移行します。学問領域は人間対人間に留まらず、人間対組織、人間対社会、人間対地域、人間対環境と多岐にわたります。そうしたさまざまな関係性の中で起こる出来事に対し、具体的な働きかけを行う能力を養うことがこの学部の創設理由です」と新井信一教授は話します。

「コミュニケーション学科とは、相互理解能力を養う学科です。メディア、ビジネス心理、グローバル、SNSといった専門領域を持つ教授陣が授業を受け持ちます。組織の内外で、どういう人間関係を築くのか？　そうした実践的な知識を学生たちは学びます。一方の共生デザイン学科ですが、有形のデザインだけに留まらず、無形のデザイン、つまりデザインを介して社会を読みといたり、新しい企画を考えたりすることを学びます。たとえば、地域連携プログラムの中で新たな提案をしていくシーンなどを具体的に想定しています」。

続けて、新井教授は「両学科に共通して、3年次の春学期に『プロジェクト科目』を設置していることが、人間共生学部の大きな特徴」と説明します。この「プロジェクト科目」は、具体的には、留学や長期インターンシップへの参加、地域自治体や企業と連携したプロジェクトなどに、最長半年間をかけて、一つのテーマにじっくりと取り組みます。

「これらは課題解決型プロジェクトですので、実際の社会における課題をテーマとして取り組みます。具体的な課題の中から、どう解決を導いていくか。そのプロセスを実体験として学ぶということなんです」。

学生は最大半年間、この活動を通じて社会との関わりを考えることになります。つまり、この「プロジェクト科目」を通じた実績的な教育が、人間共生学部のコアとなるのです。

そのほか、両学科から選抜した学生に機会を与える「共生コミュニティ分野」という専門科目群も予定しています。そのシラバスには、NPO、ソーシャルビジネス、リーダーシップ、共生、コミュニティというキーワードが並びます。

「たとえば、リーダーシップと言っても〝権限のないリーダーシップ〟を念頭におきます。一組織に属する人物が、仲間との意見を調整しながら、解決への道筋を導き出し、他のメンバーとともに問題に対処していく。それが現代社会に必要とされるリーダーシップなんです」。

両学科の3年生全員が履修する「プロジェクト科目」と、両学科の学生が履修する「共生コミュニティ分野」。この二つの科目が縦軸・横軸となり、人間共生学部の核となり機能する、と新井教授は語ります。

待望の新校舎がついに完成

最新の施設設備によるICT教育の展開と「ほんの学校」の新たな取り組みに期待が高まります

新校舎全景

礼拝堂

2014年9月、関東学院小学校に待望の新校舎が完成しました。丘陵地に立つ限られた敷地を有効活用し、教育効果が最大限に上がるよう意図して設計された校舎であると、岡崎一実校長は説明します。

「地上5階建て。既存の教室棟と隣接し各階が廊下でつながっているので、一つの建物のように感じられます。子どもたちがたいへん生活しやすくなりました」。

4、5階には最大600人が収容できる礼拝堂を設えました。この礼拝堂が関東学院小学校におけるキリスト教教育の象徴となります。

「ここでみんなで心を合わせて賛美歌を歌い、聖書のお話を聞き、礼拝を守る。6年間を通じて子どもたちの心を育み成長させるものがきっとある。私はそう信じています。

ランチルーム

礼拝堂は、入学式や卒業式、学習発表会といった学校行事にも活用します。このため照明、オーディオ・ビジュアル設備を備えるほか、会場の様子をホワイエの大型モニターや1階のランチルームに映し出すシステムを導入しました」。

この礼拝堂にはパイプオルガンの設置を予定していますが「それは子どもたちに本物の響きを届けたいため」と岡崎校長は話します。

一方、ICT教育の面では、PCルームにWINDOWS8を搭載したノートPCを40台用意しました。これらは、すでにある40台のiPadとあわせ、全館で繋がる無線LANを通じて、どの教室でもイントラネット、インターネットを利用することができます。

「黒板の代わりに全教室に設置したホワイトボードには、PCからの映像をプロジェクターで直接映し出すことができます。デジタル教科書や算数ソフトがストレスなく活用できるようになりました。こうした新しい技術により、授業のさらなる改善を図っています」。

また、関東学院小学校がいま力を入れているのが「ほんの学校」プロジェクトです。教室棟の図書室を中心にして、学校全体を〝三春台ライブラリー〟にしようと、本棚を各所に設置しています。

「本が常に身近にあることで、本が好きな子どもに育ってほしい。そして、たくさんの物語に出会ってほしい。そのきっかけを作る意図があります。保護者が自由に手にとれるような本棚もロビーにあります。先日は『魔女の宅急便』の作者である角野栄子さんにお越しいただき、新しい礼拝堂で5・6年生にお話をしてもらいました」。

さて、関東学院小学校では、2013年4月からデリバリー方式のスクールランチを取り入れています。「自分が口にするものに関心を持ち、自分の身体を作る」ことを子どもたちが意識する重要な食育の機会となります。岡崎校長は続けます。

「その舞台となるランチルームは、2学年が同時に着席できるキャパシティが備わりました。学年を越えた交流の場としても活用しています」。

充実した教育環境で、これから展開される教育に期待が高まります。

関東学院小学校 校長

岡崎 一実

横浜国立大学大学院教育学研究科修士課程修了後、神奈川県内の小学校教諭になる。平和学園小学校の教頭、校長を経て、2012年から現職。「校長室は2階玄関正面にあります。子どもたちの相手ができる時は、ドアを開放しています。校長室前に置いた本棚をきっかけに保護者のみなさまと交流できるといいですね」。

法学部キャンパス移転について

まずは2016年度に入学する1年生を対象に、横浜・金沢八景キャンパスにて講義をスタート。翌年には、全学年の講義を金沢八景キャンパスに移します

2017年4月、関東学院大学法学部は金沢八景キャンパスに移転します。その移転の目的を、村上裕学部長はこう話します。

「目的は二つあります。一つは、総合大学としてのメリットを法学部の学生にも与えたいという趣旨です。学生にとって、いろいろな学部の仲間と触れ合う機会を作ったり、他学部受講制度を活用し、学びの領域を拡げるために、キャンパスの統合は有効です。

もう一つは、キャンパスを集中させ、サービス面における学生満足度を高める意図です。私は情報科学センターの所長として、大学そして学院全体のIT環境整備に従事した経験があります。本学の情報環境整備は決して他大学に劣るものではありません。しかしながら、学生満足度についてはいまひとつ。その背景には各キャンパスのインフラを整えるために、資本が分散してしまったという理由が挙げられます」。

さて、そのキャンパス移転と同時に、法学部では2017年に改組を予定しています。それを機に、村上学部長は「他学部の授業をカリキュラムに加えることを想定している」そうです。

「経済学部や2015年4月に開設する社会学部の学部長とも、相互協力していくことで意見が一致しています。これまでは、社会科学系の各領域の授業を法学部は自前で用意してきました。

しかし、金沢八景キャンパスに移るのならそれぞれの学部の授業を受講できるようにしたほうが自然です。そこでは、法学部の学生と経済学部の学生とが隣り合わせになり、相互に得意ジャンルを教え合うなどの交流があっていいでしょう。その延長線上に、学部の枠組みを越えた共同研究なども期待できます」。

具体的には、金沢八景キャンパスの正門間近の場所に、新棟建設の準備を進めています。その新棟には教室や研究室などが入りますが、決して法学部のためだけの校舎ではありません。現在はまだ計画中としつつも、「1階はカフェテリアにする予定です。ですから、滞在型キャンパスを目指す校舎として、金沢八景キャンパスの全学生にメリットがあるものとなる」と話します。

では、ここで関東学院大学法学部について、改めてメッセージをうかがいます。

「資格取得や技術の修得が学部人気と直結している現在、法学部で取得できる資格は、みなハードルが高く、法学部が敬遠されがちであることも事実です。弁護士はもちろん、司法書士、行政書士といったパラリーガルと呼ばれる法曹資格も、取得にはかなりの努力が必要です。ただ一方で、そうした資格を取ることだけが、法学部で学ぶ目的ではないのです。法学部とは、法の精神が私たちに伝えていることは何なのか。なぜその法律が社会に必要とされるようになったのかを学ぶ学部です。

法は国家・社会の基本。将来どのような道に進もうとも、法的な観点に照らした判断基準をもって行動できるようになること。それこそが法学部で学んだ最大の成果だと考えます」。

法を学び、これからの社会を真摯に見つめていく人物を育てたい。村上学部長は、真っ直ぐに前を見つめ、そう言葉を結びます。

関東学院大学 法学部 学部長

村上 裕

一橋大学大学院修了後、1990年に関東学院大学に着任。1991年の法学部開設以来、学生の指導に取り組む。専門は西洋法制史。主な著書に『概説西洋法制史』(共著、ミネルヴァ書房)など。「社会をさまざまな角度から見てみたい……、法律とは、そんな真摯な気持ちがある人に、ぜひ学んで欲しい学問です」。

学院のこんな人、あんな人

関東学院の学生や卒業生、先生方にスポットを当て、紹介します。さて、あなたはこの人を知っていますか？

プロサッカー選手
日野 健人 氏

2012年に関東学院大学経済学部を卒業後、「HBO東京」による海外支援プロジェクトのサポートを受け、2014年2月にオーストリアリーグの「USVヴィース」と契約。同年8月にモンテネグロリーグ「FKアーセナル ティヴァト」に移籍。今シーズンもモンテネグロでのプレイを予定している。在学時は4年間 サッカー部に所属した。

海外に出て、何が起きても動じない精神力を持ちました

「学生時代から海外での生活を考えていた」という日野健人さん。日野さんが関東学院大学を卒業する2012年に、社会人サッカーチーム「HBO東京」が海外支援プロジェクトを立ち上げました。それはまさに〝渡りに舟〟だったそうです。

「海外に出て、いろんなものを見てみたい。そして人間的に成長したかったんです。僕にとってのサッカーとは、海外に出るための手段だったのかもしれません」。

自分の気持ちを改めて確認するように、当時を振り返る日野さん。そのしっかりとした口調に、揺らぎない志が滲み出ます。

「最初に生活したオーストリアは経済的にも豊かで、人々の感性も朗らかなものでした。良い人間関係も築けたし、居心地も良かったんです。それに対し、8月からプレイしているモンテネグロは、旧ユーゴスラビアから分裂した国の一つ。未だ人種差別や領土問題といった紛争の火種を抱えています。世界のさまざまな状況を見ることにおいては、この1年間だけでも手応えを感じています」。

海外で活動していると、日本では考えられないようなことも起こるといいますが、日野さんは「その一つに、言葉の壁がある」と続けます。

「今のチームは監督、コーチとも英語が通じない。彼らが話すのはセルビア語です。ですから言葉が通じにくい分、僕はプレイで表現するしかない。練習から気を抜かず、姿勢を伝えていくことが大切です」。

普段からしっかりと相手の目を見て握手することを心掛けているそうです。「海外に出るまで、コミュニケーションとは言語のことだと思っていましたが、言語以外でもコミュニケーションは取れるんです」と、まっすぐに答えます。

そんな日野さんですが、関東学院大学での生活を振り返ってもらうと「いろいろな人と出会い、学んだ」と言います。サッカーの名門高校で過ごした高校時代は、縛られる時間が多かったそうです。

「それとは対照的に、大学では自分の時間がしっかりとありました。アルバイトをするのも部活に打ち込むのも、決めるのはすべて自分。将来の進むべき道も、真剣に考えることができました。僕にとっての学生時代とは、そういう大切な時間でした」。

決して順風満帆ではなかった学生生活。怪我に泣き、試合に出られない日々が続くこともあったそうです。そんな時に、サッカー部の監督から人間としての姿勢を教わったと続けます。

「サッカー選手である前に、人間として一流であれ」。

この監督の言葉を今も糧にして生きている、と日野さんは語ります。

なお、日野さんの活動は下記ブログから確認できます。

http://ameblo.jp/austria7/（日野健人ブログ「Next One」）

株式会社『ヒロキ』代表取締役社長
権田 浩幸 氏

関東学院小学校、関東学院中学校高等学校を経て、大学卒業後、広告代理店勤務。2008年『ヒロキ』入社。2011年より代表取締役。13年エチオピアのハイレマリアム・デサレン首相が来社。「エチオピアの材料で良いものをつくった日本で初めての会社」と高い評価を受ける。14年安倍首相のエチオピア国訪問に同行。エチオピアに縫製工場設立。

「塗り隠さないから現れる、本物の魅力」を世界に

お洒落で個性的なお店が並ぶ横浜・元町。なかでも、店頭に置かれた存在感のある赤いクラシックカーがひときわ目を惹くお店があります。1952年創業の『ヒロキ』。革製品のお店です。

社長を務める権田浩幸さんは、小学校から高等学校まで関東学院で過ごしました。「元町の商店主にも、関東学院の出身者は多いんですよ」と権田さん。小学校のときは1学年2クラス。こぢんまりしているので、誰でも顔見知り。先生との距離も近かったそうです。「環境や価値観が似ていたので、とても過ごしやすかったです。今思えば、先生方の目も行き届いていましたね」。

大学卒業後、東京で20年近く勤めている時、自分で何かやりたいと考え始めたときに『ヒロキ』の現会長に誘われ、未経験の分野に飛び込みました。そして、2011年からは社長を務め、会社の先頭に立ち、活躍しています。

『ヒロキ』が扱っているのは、オリジナル革衣料、バッグや革小物。しかし、その製品には、明確なポリシーがある、と権田さんは言います。

「他のお店にはないものをつくっている、という自負があります。今、一番力を入れているのは、エチオピアシープという質のいい革を使った衣類です。現地につくった自社の縫製工場では、縫い手が一人で一着仕立てるというやり方で生産しています」。

分業制が当たり前の縫製業界で、このやり方は効率や経済性を考えればありえないそうですが、「こうすることで、縫製スタッフのスキルも格段にあがりますし、やりがいも生まれます。みんな一年もここで経験を積めば、洋服を一着仕立てる技術が身につきます」と権田さん。自社の利益だけでなく、現地のスタッフにもプラスになる方法をとる、そんな真摯な姿勢がうかがえます。「エチオピア政府からも、『技術を移植してほしい』と言われていますので、この事業をエチオピアに根づかせたいです」。中国でも同様の考え方で自社工場を運営しているそうです。

「現地のスタッフといい関係を築くことができれば、必ずいい製品が出来上がります。私たちが目指すのは大量生産ではなく、集中し、丁寧に愛情を込めてつくる製品です。エチオピアでの製品づくりの私たちの合言葉は、〝世界一の製品をつくろう〟。関東学院も、横浜から世界に羽ばたく人材を輩出したいと考えていると思いますが、それと同じでしょう」。

現在、国内にあるのは3店舗ですが今後10年をかけて、海外も含めて23店舗にまで広げていきたい、と権田さんは意欲的です。お店に立ち寄った際には、ぜひ、権田さんに声をかけてみてください。「ぜひ、お待ちしております」。

「人になれ 奉仕せよ」を体現する人々

右は在校生、卒業生なら誰もが知っている関東学院の校訓です。
ルワンダにおいて、平和構築活動に力を注いでいる佐々木和之さんこそ、
この言葉を形にしようと、努力を続けている人物です。

日本バプテスト連盟 国際ミッションボランティア

佐々木 和之 氏

日本バプテスト連盟国際ミッションボランティア。1965年神奈川県生まれ。1988年から計8年半に渡りエチオピア農村自立支援に従事。2005年よりルワンダにて現地NGO法人リーチ（Reconciliation Evangelism and Christian Healing）と協力し、大虐殺後の「癒しと和解」プロジェクトを展開。2011年からはプロテスタント人文社会科学大学の教員として、平和・紛争研究科の設立と運営に尽力。

昨年9月30日、ルワンダのプロテスタント人文社会科学大学で卒業式がありました。同大学の私が所属する開発学部には、2年半前、ルワンダ初となる平和学専攻コースが創設されています。卒業生には私が関わった平和学専攻の第一期生4名がいて、万感の思いで送り出しました。

ルワンダは1994年に起きたフツ族によるツチ族のジェノサイド（大虐殺）で知られていますが、20年が経ち、多くの人々が加害者か被害者という状況下で、いかに手を取り合って新しい国を創造していくか大きな問題となっています。20年といえば、身近な人の死はまだ生々しい。ですから和解の道は険しいと思い知らされる一方で、許しと償いを実行していこうという人々がいることも事実です。

私は2000年、イギリスのブラッドフォード大学の博士課程で平和構築について勉強する予定になっており、その前に現地を感じたいという思いでルワンダに行きました。当時34歳。エチオピアで農村自立支援活動に長く従事していましたし、ジェノサイドから時間が経っていましたから、対応できると思っていましたが、衝撃を受けましたね。

ツチ族が立てこもり、フツ族が襲撃した教会は、6年経っても遺骨や衣類がそのまま残され、天井や床は血の跡だろう黒いシミだらけ。また、そこから発される臭いは鼻を突くほど強烈でした。そのとき「こんなことが起きてしまった国で人々が一緒に生きていけるのか」と思ったのも事実です。ただし平和について学びたいと思ったら、人に話を聞くしかありません。そこで、大学在学中に再訪して、ジェノサイドの加害者と被害者の約80人を尋ね歩きました。そして聞くほどに、単純にはフツ族は加害者、ツチ族は被害者という公式は当てはまらないことがわかってきたんです。

そうして虐殺を生き残った人の中には、自ら傷つきながらも歩み出している人がいました。ルワンダに惹かれたのは、そんな小さな希望の光がそこここに散らばっていて、その光に私が励まされたからでしょう。関東学院の校訓の「奉仕せよ」とは、奉仕することで、それ以上の癒しが得られることを端的に表した言葉だと思いますが、まさにそんな体験を得られたわけです。この希望の光を絶やすわけにはいかないという決意が2005年にルワンダの地を再び踏ませたんです。

もうすぐルワンダでの暮らしは10年です。和解への歩みは長い年月を必要としますが、加害者と被害者がともに生きようとする場に何度となく立ち会ってきました。そんな日々が形となって目前に現れたことがありました。それが〝自転車の二人乗り〟です。

とある集会後に加害者の男性と被害者の女性が二人乗りをしながら、家路につこうとしていたんです。私たちの活動によって、壊れてしまった関係をそこまで修復している人たちがいることを目の当たりにして、励まされ、癒されましたね。この〝二人乗り〟は大海の一滴かもしれませんが、それが子どもの世代へ受け継がれたときには流れになってくれるはずです。だからこそ、若い世代は学ぶことで希望を持ってもらいたいのです。

卒業生の一人は、卒業後に和解のために活動する現地のNGO法人リーチに所属することになりました。彼は「子どもへの平和教育が大切だ」と言って、そのNGOにとって新しい活動を立ち上げようと張り切っています。まさにルワンダには、頼もしい次世代が育っているところなんです。

ルワンダ人は繊細で、遠慮深くて、思いやりがあって、シャイな人が多いですね。いまはまだ、彼らが抱えている不安や恐怖を払拭しきれていませんが、いつしかルワンダ人本来の性格が発揮される時代が来ると願っています。

Embodying the serve the world ethos

Professor. Kazuyuki Sasaki, Japan Baptist Convention International Mission volunteer

Widely known among students and graduates alike for his committed efforts toward development and peace-building in Africa, Kazuyuki Sasaki embodies the motto of Kanto Gakuin.

After studying tropical agriculture at university, Sasaki went to work in rural development in Ethiopia. Shocked by the deep scars of conflict upon visiting Rwanda in 2000, he enrolled the same year in a UK-based doctorate in peace studies and post-conflict reconstruction.

In 2005, encouraged by hope among Rwandan survivors, Sasaki returned. Now a university lecturer in Rwanda, he helped found the country's first Department of Peace and Conflict Studies. With trauma from the 1994 genocide still fresh, the country faces massive challenges of atonement and forgiveness.

Sasaki came to realise that the path to peaceful co-existence requires looking beyond the simplistic view of Hutu perpetrators against Tutsi victims, instead acknowledging both positions in order to move forward. Building upon the compassion and depth of the Rwandan national character, Sasaki now strives to impart hope to the younger generation through learning.

ディレッタントたち Vol.4

イタリア語の“喜びを見出す人”が語源のディレッタント。
学院関係者の知られざる趣味を探るこのコーナー。
今回登場するのは、バイクと華道の達人です。

バイクの自由な雰囲気に憧れて

関東学院大学 工学部 教授　小林 謙二

「北は北海道から、西は奈良・大阪まで、自由気ままにツーリングしてきた」と、小林教授。行く先だけを事前に決めて、あとは現地でのお楽しみなんだそうです。

小型飛行機については120時間の飛行経験を持ち、一級小型船舶免許も有する小林謙二教授ですが、今回は大型バイクに関するお話。教授は、陸・海・空を制する、大の乗り物好きなのです。

「ドイツに留学している時に、アウトバーンを颯爽と走り抜けていくバイクに憧れてね、日本に帰国してすぐにホンダのナナハンを入手しました」。

それから40年という年月が経過していますが、現在も大切に乗り続けているBMW「R100GS」は、教授にとっていまだ2台目。休日、ツーリングに出ない時には、自身でもバイクに手を入れるそうです。「オリジナルな形の方がいいと思っているので、いわゆるチューンアップはしません。部品を外して、磨き上げ、また元に戻す、その程度です」と大らかに笑い、小林教授はこう続けます。

「新しいバイクは、どうも大人しすぎていけません。今のバイクはエンジンさえもICチップで制御されていますから。もちろん、取り扱いは今のバイクの方がずっと簡単。若者にとっては、それが当たり前なのかもしれませんが、僕らの世代から言わせてもらうと、そんな楽なバイクがあってたまるかと（笑）」。

小林教授がかつてドイツに留学した目的は、彼の地で日本よりも研究が進んでいた人間工学を学ぶことでしたが、「このバイクはむしろ反対。人間にやさしくない設計です（笑）」。

でも、もう1台バイクを手に入れるとしても、BMWがいいそうです。

「このメーカーは、部品ひとつをとってみても、質実剛健さが滲み出ているんですね。ドイツ人の昔気質なモノづくりが、このBMWのバイクには、脈々と受け継がれているような気がするんです」。

排気量1000ccのゲレンデスポーツモデル。不整地も走れる走破性の高さが特徴で、パリ-ダカールのレースモデルとほとんど変わらないのだとか！
函南原生林の入口で。

“水越順花”の名で活動しています

関東学院 法人事務局人事課　水越 順子

「社会人になって、通い始めたのが草月流のいけばな教室。お花だったら自分の部屋にも飾れるし、いいかなと思って」。

柔らかな笑みを浮かべ、そう話すのは、法人事務局人事課の水越順子さん。習い始めの頃は、自分が生けた形を留めないほど直されてしまうこともあったそうですが「ここは良く入っているから、こっちはこうした方がさらに良くなるよ」という先生の教え方が自分には合っていたのでしょう。基礎が固まってきた頃には、お花を生けることが楽しくなりました」と当時を述懐します。

前衛的でクリエイティブ色が強い草月流のいけばなでは、いわゆる床の間に飾るような作品に留まらず、複数人で制作する大掛かりなディスプレイのような花展作品にも挑戦します。

「その際は、完成予想図のデッサンはもとより、現場の見取り図や作業手順書なども作成します。花展では、普段のお稽古のようにやり直しはきかないので、絵でイメージを共有して、全員で作品を詰めていくんですね」。

それはまるで、ディスプレイ制作会社のプレゼン資料のよう。創造力と緻密さという、相反する能力が求められますが、そのグループワークがとても楽しいそうです。

「全員が草月流の基礎を学んだ生徒さんたちなんですが、自分にはない発想がとても刺激になるんですね。自分の考えや発想ではないものを、素直に認められるようになっていきました」。

ここ数年はブランクがあったものの、教室の仲間から「もう一度、花展をいっしょにやろう」と声をかけられ、稽古を再開。現在は2週間に一度、教室に通っているそうです。

そんな水越さんに、ご自宅でも普段からお花を飾っていますか？と問うと「玄関先の小さなスペースですが、季節を感じられるものを時折（笑）。本当は忙しくて、なかなか手が回らないんですけどね」と話していただきました。

みなとみらい「緑のギャラリー」にて展示された2011年の花展作品。スペースをフルに活用した大掛かりな作品を、グループ共同で構想段階から練っていきました。次回は、2015年6月20日（土）～22日（月）に開催されます。

関東学院を卒業した国際人 Vol.4

2006年関東学院大学工学部機械工学科卒業

薄羽 哲央 氏

オリーブ・スピリットのもと、異国の地で人生を歩んでいる先輩方がいます。その一人、薄羽哲央さんは南アフリカ・ヨハネスブルグで、いすゞ自動車の南アフリカ駐在員として、現地の輸送業務の発展を後押ししています。

南アフリカは1994年のアパルトヘイト撤廃以降、経済は徐々に改善されていますが、貧困や教育といった問題は山積しています。そんな南アフリカ・ヨハネスブルグでの私の駐在がスタートしたのは2013年11月。ようやく1年を超えたところです。私の仕事は、お客様のトラックの稼働を支えるため、現地スタッフへの技術的なサポートをはじめ、南アフリカと日本のパイプ役を担っています。

トラックは荷物を運ぶことを主な目的としていますので、大型車では46トンものトレーラーを引いて走ることもあります。したがってトラックを安全に稼働させるためには整備が重要になります。適切でない整備は安全を脅かし、故障はお客様の稼働率を下げ、経済的な損失を伴います。

一例として、一部のトラックは、未舗装路や舗装が崩れた悪路でも猛スピードで走行するなど、日本では考えられないような過酷な使われ方をされる場合があり、そのため、トラックのフレームに影響が出てしまうことがあります。私が車両の早期故障復帰のため業者を訪れ、修復が適切に行われるよう指導する場面もありました。

私たちは「運ぶを支え、信頼されるパートナーとして豊かな暮らし創りに貢献します」という企業理念のもと、安全・継続的にお客様のトラックが稼働できるようサポートしています。

私は整備士の仕事に就いた後、関東学院大学工学部機械工学科（現・理工学部理工学科）に入学し、内燃機関研究室に在籍していました。そこでお世話になったのが三竹敏広教授と武田克彦准教授です。大学3年生の夏休みに武田先生に短期語学留学を勧められ、英語を使ったことも海外旅行をしたこともなく、またアルバイトで学費を稼いでいた身の上だったため、余裕のある経済状況ではなかったのですが、先生の言葉が背中を押してアメリカに行くことを決めました。今の仕事にすんなり入れたのは、あのときの経験のおかげ。真摯に悩みを聞いてくれた先生に感謝することしきりです。

アフリカは今後10～20年の間に大きく経済成長すると予測されています。道路環境も整備され、輸送力も格段に進歩することでしょう。そのとき、いすゞ自動車がカスタマーケアを主軸に置いたサービスが認められ、No.1の地位を獲得できるよう努力していきたいと思います。

トラックフレーム改造会社で、同社の経営者とエンジニアに改造方法を説明している様子〈下左〉。薄羽さんが働くIsuzu Truck South Africaのサービスエンジニアであるアンソニー・マムシ氏と。マムシ氏は故障車両の早期復帰のために南アフリカ全土を飛び回っています。薄羽さんは彼をはじめとする多くのエンジニアのサポートを行っています〈下右〉。 ショッピングセンターにあるネルソンマンデラ像と。彼は、南アフリカの象徴となっています〈左〉。日本食材が揃わない南アフリカで、現地の材料を使って“日本風料理”の腕を上げ、日本人駐在員パーティーではその腕を如何なく振るい、たいへん喜ばれているそうです。

海外で活躍しているこのページに登場してくれる卒業生をOLIVE-SPIRITでは募集します！自薦、他薦を問いません。kouhou@kanto-gakuin.ac.jpまでご連絡ください！

Cosmopolitan Graduate of Kanto Gakuin

Mr. Tetsuo Usuba graduated with a Mechanical Engineering degree from the Faculty of Engineering at Kanto Gakuin University in 2006. He now works in South Africa.

Stationed in Johannesburg, South Africa, Tetsuo Usuba has been involved in supporting the local transportation industry through his work with Isuzu. The South African economy has improved since the 1994 abolition of Apartheid and the future looks bright.

Usuba works in supporting truck operations for customers, including technical support for local staff and serving as an information mediator between South African and Japan.

He says “It’s important for customers to make truck working to generate profit. We are tacking to support truck operation with safety. And, I would like to impart my technical skill to local staffs and dealers to contribute South African growth. On the other hand, South African staffs has many ways to make customer happy which Japanese does not have, I will learn them from the field.

“I am also grateful for the time I spent at Kanto Gakuin under Professors Mitake and Takeda. Their invaluable advice and the experience I gained there prepared me very well for this work.”

関東学院ネットワーク

関東学院の卒業生が経営に携わっているお店に行ってきました。今回はうなぎと洋食、ふたつの“美味しい”をご紹介いたします。

味わい軽やかなフワフワの鰻を召し上がれ

江戸徳

肝吸付きの鰻定食（2,800円）は、身がフワリとしてやわらかな食感。タレが後に残らず、とても上品な味わいです。また、おかずの品数で選べる800～2,100円までの6種類のお弁当は、いずれも丁寧な仕事ぶりが伝わるやさしい味付け。
なかでも煮物が絶品で、具材に出汁が染み込んでいるから、とても美味しくいただけます。
営業時間／11:30～14:00　17:00～21:00　定休日／土曜・日曜・祝日
神奈川県横浜市中区太田町5–63　TEL.045-681-7123
http://www.juno.dti.ne.jp/~edotoku/index.htm

明治20年創業の「江戸徳」は、もともと現在の場所に店舗を構えていました。第二次世界大戦の戦禍を避け、一時、磯子に移っていましたが、戦後の復興事業として横浜市が現在のビルを再建したことから、昭和30年に再び創業地での営業がはじまったそうです。店名は“徳さん”と呼ばれた初代が、江戸から来て店を開いたことが謂れ。かつては鰻料理専門でしたが、昭和45年頃から割烹料理へとメニューが広がり、現在のメニュー構成に至ります。

その鰻は、軽やかな味わいが大評判。4代目店主・山田安宏さんは「特別な食材を使っているわけではなく、あくまで基本に忠実なだけ」と謙虚な姿勢ですが、聞けば、時間をかけて鰻をしっかりと蒸しているそうで、「身が柔らかくなり、軽やかな口当たりを楽しめる」と、教えていただきました。

そして江戸徳のもう一つの人気がお弁当。自転車で往復できる距離なら、出前注文も可能です。一方で、2階には3部屋の座敷があり、襖を外すと25名程度の宴会場に。1フロアを貸し切れるので、気兼ねなく楽しめそうです。現在は5代目を継承予定のご子息、純也さんとお嫁さんの麻実子さんも店を守り立てていますが、二人は関東学院中学校出身で、元クラスメイトなんです。

自慢の洋食メニューと、おいしいビールで乾杯！

レストラン味蕾亭

看板メニューのビーフシチュー（1,580円）は、3日間丁寧に煮込んだ肉と、その旨味が染み出たスープで作る自家製デミグラスソースが調和して、とても美味。付け合わせの野菜は、プラス300円で追加注文することも可能です。またオーナー斉藤さんの発案で、このビーフシチューがテイクアウトできるようになりました。こちらは1,080円と、お店で食べるよりもさらにお得！電子レンジで加熱するだけで、プロの味をいつでも楽しめます。
営業時間／10:00～22:00（21:20ラストオーダー）　定休日／日曜・祝日
神奈川県横浜市西区高島2-3-19　TEL.045-441-3488

1989年にオープンした「レストラン味蕾亭」は、まるで昭和にタイムスリップしたような懐かしい雰囲気が漂う洋食レストランです。幅広い重厚なカウンターのある贅沢なお店の作りは、横浜でも探すことが難しくなりました。

代表取締役の斉藤祐子さんは、小学校から高等学校までを三春台で過ごし、大学では工学部で建築を学んだ関東学院の卒業生。お母さまからこのお店を引き継ぎ、2代目として日々店に出て、切り盛りされています。

「じつは生ビールがおいしいと評判なんです。貯蔵工程で熟成させたキリンラガー樽詰生ビールは、ビール通に飲み継がれてきたコクのある味わい。そのほろ苦さが美味しさの秘訣ですね」（斉藤さん）。

現在はお客様のニーズに合わせて、焼酎、ワイン、カクテル類なども提供。それぞれのお酒に合ったおつまみをと、最近は洋食の枠を越えてフードメニューを増やしてきたそうです。

別フロアには着席スタイルで60名まで収容できる宴会場もあり、みなとみらい線新高島駅や横浜市営地下鉄ブルーライン高島町駅からのアクセスも良いことから、関東学院の各種同窓会をはじめ、さまざまな宴席に利用されています。

広報企画課から

関東学院の10年後の将来構想を描く「未来ビジョン」。2014年に大学を中心に策定を開始しましたが、2015年は、こども園から高等学校までを含む関東学院全体での策定がいよいよ本格的にスタートします。

10年後、20年後の社会を見据え、これからの社会に求められ活躍できる人材を輩出していくために、関東学院がどのような姿であるべきなのか。どのような姿でありたいのか。関東学院全体で考え、将来像だけでなく具体的な実行計画までを創り上げていきます。

2015年は、この「未来ビジョン」スタートの年です。秋頃には皆さんへ10年後の関東学院大学の姿をお見せすることができるでしょう。しかし、本当に重要かつ困難なのは、その「実現」です。社会とともに成長し、社会に提案していく大学としてのブレイクスルーを目指す、新しい関東学院大学の姿にご期待ください。
関東学院 広報企画課：(045)786-7006 / kouhou@kanto-gakuin.ac.jp

OLIVE-SPIRIT
関東学院学園
KANTO-GAKUIN NEWS No.49 2015.3

Contents

P.2 「未来ビジョン（仮）」第一次案について
P.4 それぞれの展望
P.8 待望の新校舎がついに完成
P.9 法学部キャンパス移転について
P.10 Who's Who?
P.12 「人になれ 奉仕せよ」を体現する人々
P.13 ディレッタントたち
P.14 関東学院を卒業した国際人
P.15 関東学院ネットワーク

関東学院小学校新校舎にて撮影。
礼拝堂での礼拝の様子。

Table of Contents

P.2 Concerning the First Proposal for our 'Future Vision' (working title)
P.4 Respective Outlooks
P.8 The long-awaited new school building completion
P.9 About law department campus move
P.10 Who's Who?
P.12 Embodying the serve the world ethos
P.13 Dilettantes
P.14 Cosmopolitan graduate of Kanto Gakuin
P.15 Kanto Gakuin Network

学校法人
関東学院
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
法人事務局 ☎045-786-7028（代）
http://www.kanto-gakuin.ac.jp/

関東学院学園 第49号 2015年3月1日
発行：関東学院 編集：関東学院法人事務局企画部広報企画課